

令和 8 年度
鹿児島大学法文学部
法経社会学科 法学コース
人文学科 多元地域文化コース
心理学コース

学校推薦型選抜 I
「小論文」 問題冊子

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. この表紙の下には、問題用紙 5 枚 が綴じられています。
3. 問題冊子とは別に、解答用紙 3 枚、下書き用紙 1 枚 が配付されています。
4. 「解答はじめ」の合図があつたら、問題冊子、解答用紙、下書き用紙の枚数や種類に間違いがないか確認しなさい。
5. 試験中、問題冊子や解答用紙の乱丁、落丁、印刷不鮮明、汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
6. 解答は、解答用紙その 1～その 3 の順に「縦書き」で記入すること。
7. 試験終了後、解答用紙以外はすべて持ち帰ること。

次の課題文を読んで設問に答えなさい。

一九九〇年代、タイの気象庁長官を務めていたのはスミス・ダーマサロジャ博士であった。スミス博士の仕事は国内の気候観測システムの働きを管理することであり、その業務には各地方の気象台と連絡をとること、そしてもちろん、毎日の天気予報を出すことも含まれていた。また、気象と直接の関係はないが、津波に対する緊急対応の責任者でもあった。この緊急対応業務の問題点は、太平洋地域の国々がすでに一九四〇年代終わりから津波警報システムを整えているのに対して、インド洋地域にはそれに匹敵するものが備えられていないということであった。そして、タイは間違いなく被害をうけるはずなのに、恐ろしく粗末な備えしか持っていないかった。地震を感知するシステムはあったが、地震が津波を起こすかどうかを知る方法はなかったし、もし起こったとして、危険な海岸地区に警告する方法もなかった。一九九八年にスミス博士は臨海地域の行政責任者たちに警報ネットワークをつくるよう必死で訴えたが、耳を貸すものはいなかった。行政責任者たちの言い分は、「サイレンは安いものではない」「そんな装置を立てたら観光産業に悪影響がある」というものだった。つまるところ、バカンスの間に津波の心配をした人があるのか、ということである。タイは翌年、スミス博士が望んでいたものとは違う形でこの論争に最終的な決着をつけた。彼を新しい長官と入れ替えたのだ。

この決定のツケは六年後のマグニチュード九・三の地震で、津波がインド洋全域を襲ったときに払わされることになった。バンコクの地震計が揺れを記録したとき、国中の気象学者が津波緊急事態を宣言するかどうか決めるために緊急招集された。しかし彼らは、何をなすべきかよくわかっていなかった。「避難命令を出した後で、やっぱり誤報だとわかったらどうするのか」「専門家としての評価に影響くのではないか」そして、結局、彼らは何もしないことにした。もちろん、誤報ではありえなかった。一時間もしないうちにタイの沿岸で五〇〇〇人以上の人びとが亡くなり、インド洋を囲む一四の国々で二三十万人以上の人びとが亡くなった。

二〇〇四年の津波以前に、比較的低予算ですむにもかかわらずインド洋津波警報システムを全域で導入しないことが決定されていた。この投資に対する価値の見誤りからわかることは、近視眼的思考癖が発生頻度の低い大災害対策への投資を妨げる最もひどい心理的バイアスだということである。我々はどう行動すべきか決定する際、長期間の予想よりも短期間の結果に注目してしまう傾向がある。

甚大な被害をもたらしたがゆえに二〇〇四年の津波は特に際立った例であるが、似たような近視眼的思考はほとんどすべての災害事例でみてとることができる。二〇〇五年のハリケーン・カトリーナはニューオーリンズで大洪水を引き起こした。これも、一九六五年に提案されていた堤防システムの完成と整備を米国陸軍工兵隊とルイジアナ州政府がぐずぐずと引き延ばさなければ防げたはずのものだった。同様に、米国連邦裁判所は、二〇一〇年のメキシコ湾岸原油流出事故を防げなかった原因は、経費を最小限にするために長期的な安全対策よりも目先の利益を優先するBP社の企業体質にあると結論づけている。どちらのケースでも、事前に大きな損失を低減するための対策に投資する機会があつたのにもかかわらず、それらはやり過ぎされ、より目先の短期的な損益についての関心が長期的な必要性に打ち勝ってしまったのである。

本書で論じるほかのすべての心理的バイアスと同様に、近視眼的思考癖を克服しがたいものにしてているのは、これが日常生活で行うほとんどの意思決定にとっては良いバイアスとして機能するからである。結局のところ、いま現在のことはこれから先のことより大事であることが多い。もし、自分の家が火事になったとして、いの一番にすべきことは逃げることであり、消防署に電話するのはその次でいいし、保険の査定に何週間かかるかなどといった先々のことを心配している場合ではない。しかしながら、物事がうまく行かなくなると、我々の脳は先々問題になる事柄をあまりにも遠くに押しやってしまう。将来の結果の重みづけを下げるだけではすまず、時にはまったく無視してしまい、直感的な選択が有害な結果を導くのである。

短期的な結果と長期的な結果のトレードオフについて研究してきた神経学者は、我々の神経システムの中に犯人が潜んでいるという。つまり、我々の脳が目の中の出来事に対して自らに報酬や喜びを与えるやり方と、想像上の将来について報酬や喜びを与えるやり方がかなり違うということだ。わかりやすくするためにダイエツト中の人を考えてみよう。彼は一生懸命に甘い食べ物を避け続けているが、あるとき突然、大好きなデザートに誘惑されてしまう。彼の分析的、論理的思考を担う脳部位（まずは前頭前野）が立ち上がり、将来のために目の前の誘惑に負けないよう彼をおしとどめようとする。残念なことにこれは、空腹のような根源的で衝動的な情動をつかさどる、大脳辺縁系に一発ノックアウトされるのがオチである。争ったところで間違いなく後者が勝ち、彼はデザートに屈することになる。もちろん次の日、辺縁系がすっかりおとなしくなってしまうと彼は深く後悔し、自制心の欠如を嘆くことになる。しかしそれでは手遅れで、近視眼的思考癖がすでに悪影響をもたらしている。

視点は異なるが経済学者も、近視眼的思考癖を深い興味をもって研究してきた。彼らは、人が熟慮した場合、すぐに得られる利益は将来に得られる利益よりもどれくらい強く好まれるのかを調べてきた。経済学者の視点からは、人びとが今すぐに得られる利益と将来に得られる利益を比べて判断する場合、銀行家が時間遅延によるお金の価値割引を考えると同じように判断すべきと考える。例えば、あなたの銀行が気前よく二〇%の金利を預金につけたとしよう。すると、あなたは今ポケットに一万円あるのと一年後に一万二千元受け取るのと同じ価値と感じなければいけない。ところが、(たぶん誰も驚かないだろうが)人びとが実際にどのように時間とお金の価値とをトレードオフするかという実験を行うと、人びとの直感的なお金の時間的価値評価は銀行家が考える評価とは似ても似つかないものになる。人びとの直感が決まったように「双曲割引 (hyperbolic discounting)」と呼ばれる判断を示す。これは簡単にいうと、人は利益が手に入る喜びをほんのちよつとでも先延ばしされることを嫌い、先延ばしされる場合には標準的な利子率といった合理的な基準によるのではなく、より過大な代償を求めるということである。別の言い方をすれば、少しでも先延ばしされるとものごとの価値は

大きく減じるということである。双曲割引という特性によって人は一年後の一万二千円よりも今日の一万円の現金を望む。ところが、例えば、一カ月後の一万円と一年一カ月後の一万二千円のように、もともとの一万円が遅れるのなら喜んで一年一カ月後の一万二千円を選ぶ。一方、銀行家にとつての損得勘定ではどちらのシナリオも同じことなのである。

双曲割引は重要な示唆をもたらす。この特性は、なぜ人が災害対策への投資を判断する際に、懐から出ていく出費に過大な重みをつけ、それを避けようとしてしまうのかを説明できる。例えば、二〇〇四年の津波被害に先立って、インド洋全体に警報システムを設置する約二六〇億円の初期費用と約一億三〇〇〇万円の年間維持費用という金額は、想定される救命人数を考えた場合、たいした費用でないことはよくわかっていた。各国で分担すればそれほどの出費にはならないのに、なぜ、警報システムの明らかなメリットが国々に理解されなかったのか、合理的に説明することは難しいだろう。しかし、ここで双曲割引が心理的な説明を与えてくれる。各地域の財務大臣は津波がもたらすかもしれない遠い先の脅威について、実は十分な知識を持っていたかもしれない。しかし、警報システムにお金をかけるには、目先の課題に集中するという彼らに深く染みついた習性を覆す必要がある。予算獲得に対する官僚の反対、もつと目に見える利益との比較、次の選挙で再選される可能性、こういったことを脇に置いてまで警報システムを支持できるのか。魅力的なデザートに負けてしまうダイエット中の人とまったく同じで、心理的な短距離走と長距離走とは、政策責任者たちにおいても簡単に前者が勝ってしまうのである。

双曲割引はまた、先延ばしの横行という、災害対策を立てるべきときによく起こる現象も説明できる。双曲割引が描く逆説的な性質の一つは、人は今日の防護のために出費することをひどく嫌がりながら、同じ出費を明日の防護のためならとても良い投資案件だと判断することである。わかりやすい例として、ある住宅オーナーを考えてみよう。彼女は耐浸水工事に一〇〇万円払えば年間保険料を二五万円値引きするといわれたとする。すぐに引越す予定でもない限り、この工事への投資には大きな値打ちがある。四年で元がとれ

るばかりでなく、そのあとかなりの金額を回収できるのだ。しかし、不幸にも、もし彼女が双曲割引者なら、これはなかなか飲み込みがたい提案に思えるだろう。いますぐ一〇〇万円を現金で払うことはあまりにも大きな直近の損失なのに対して、将来の利益の動きはるか彼方のこととして、ぼんやりとしか浮かんでこないからである。しかし、投資するという決定（支払い）を翌月に延ばすことができるなら、同じ一〇〇万円の出費は現時点では受け入れやすいものに思えるだろう。なぜなら、いますぐに懐から出すときに起こるような心理的インフレには見舞われないからである。もちろん、今から一カ月経つと、一〇〇万円の出費は再度、耐えがたい痛みに感じられる。そのため彼女は毎度おなじみの先送り策に陥ってしまい、浸水対策工事が行われることは永遠にないだろう。ひと言でいうと、災害対策に要する出費は、明日に払えば良いという場合には受け入れやすく思えるが、それが今日のこととなるとそびえ立つ壁のように感じられるということだ。

『ダチヨウのパラドックス 災害リスクの心理学』

Robert Meyer/Howard Kunreuther 著・中谷内一也訳、

丸善出版株式会社、二〇一八年

※出題にあたって原文の一部を改変した。

【設問】

近視眼的思考癖の悪影響を克服するための方法について、具体的な事例を挙げて論じなさい。ただし、本文で挙げられた事例は除く。（八〇〇字以上一〇〇〇字以内。句読点および改行のために生じる空白も文字数に含まれます）。